

コピペされ、拡散されるエマソン

尾崎 俊介

アメリカにおける自己啓発本の出版史を繙くに当たり、過去から現在に至るまでアメリカで出版されてきた様々な自己啓発本を読破していく中で気づくことの一つは、これら自己啓発本の中にラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) の文章からの引用が異様に多いということである。それは単に多いというレベルを越え、少なくとも 20 世紀後半以降のアメリカで出版された自己啓発本の中で、エマソンの引用のないものはほとんどないとすら言えるレベルなのだ。それゆえ自己啓発本の読者は、本を開く度に否が応でもエマソンから何がしかのメッセージを受け取り、その都度何らかの形で啓発されることになるのである。

エマソンと自己啓発本のかくも強い絆——これは一体、どういうことなのだろうか？

「自己啓発本」という文学ジャンル

ところで、そもそも「自己啓発本」とはどのようなジャンルの本なのか。はじめにこの点から簡単に説明しておこう。

自己啓発本とは、読んで字の如く、その本を手にした読者を啓発し、社会的もしくは経済的な地位向上を動機づけるための本なのだが、基本的にはアメリカ発祥の文学形態であって、例えばベンジャミン・フランクリンの『自伝』 (Benjamin Franklin, *The Autobiography of Benjamin Franklin*, 1771-90) などがこの種の本の嚆矢と言われている。フランクリンの『自伝』は、ごく平凡な出自のフランクリンがいかにして自分を律し、自助努力と刻苦勉勵を積み重ねてアメリカ建国の父の一人にまで上り詰めたかという実践記録であり、いわば「アメリカン・ドリーム・オブ・サクセス」の原点でも

あるのだから、その意味で自己啓発本の歴史とは「チャンスの国アメリカ」の歴史と根を同じくする、極めてアメリカ的なものであると言ってもいいだろう。

事実、フランクリンの『自伝』の流れを汲む「自助努力系」の自己啓発本は、石油王ジョン・ロックフェラー、鉄鋼王アンドリュー・カーネギーなどがアメリカン・ドリームの体現者として名を馳せ、新興国家の成功神話がいよいよ現実味を増して来た 19 世紀後半のアメリカにおいて広く読まれることになる。例えばスコットランドの自己啓発ライターであるサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904) が書いた『自助論』 (*The Self-Help*, 1859) はアメリカでもよく読まれたし、その『自助論』に啓発され、「アメリカのスマイルズたらん」と欲したオリソン・スウェット・マーデン (Orison Swett Marden, 1848-1924) の『前進あるのみ』 (*Pushing to the Front*, 1894) は、そのタイトル通り、当時のアメリカ人読者の多くを鼓舞して立身出世の最前線へと送り込んだ。さらに「サーカス王」P・T・バーナムの『富を築く技術』 (P. T. Barnum, *The Art of Money Getting; or, Golden Rules of Making Money*, 1880) や「鉄鋼王」アンドリュー・カーネギーの『実業の帝国』 (Andrew Carnegie, *The Empire of Business*, 1902) など、一代で巨万の富を築いた成功者による自己啓発本もこの時代に数多く出版され、多くの読者を得た。

一方、19 世紀も終わり頃になると、アメリカ精神療法の祖、フィニアス・パークハースト・クインビー (Phineas Parkhurst Quimby, 1802-66) がその医療的実践を通じて唱え始めた新たな神学思想たる「ニューソート」を理論的土台とする全く新しいタイプの自己啓発本が登場してくる。¹ 「引き寄せ系自己啓発本」と呼ばれるものがそれで、この新種の自己啓発本によれば、人間も含めたこの世の万物は、宇宙を満たす創造力に満ちたエーテル状の物質が凝り固まったものであり、人間が思考の力を放射することでこのエーテルに働きかければ、エーテルはその思考の要求のままに凝り固まり、人間が願った通りの現実が引き寄せられるという。何しろ自分の望むモノや自分が望む状態を心の中にありありと思い浮かべるだけで、その望んだモノ／状態を現実化できるというのだから、これは楽天主義の極北ともいうべき考え方

であり、このような考え方が登場し始めた 19 世紀末以来、「引き寄せ系自己啓発本」がそれ以前の「自助努力系自己啓発本」以上に広く一般大衆から支持され、自己啓発本市場の趨勢を塗り替えてしまうことになったのも、理の当然とすべきだろう。

引用文学

ところで、人間のあらゆる思考は現実化すると説く「引き寄せ系自己啓発本」特有の楽天的な観念は、それ以前の、すなわち自助努力と勤勉を重視するフランクリンの倫理観とは相反するものであり、また禁欲的なカルヴァン主義的キリスト教倫理とも相容れないものであるだけに、各方面から批判されることも多かったのだが、² そうした批判に対して引き寄せ系自己啓発本のライターたちが反論を試みる際、彼らの多くが依拠したのが聖書であった。なんとなれば聖書には「人は頭の中で考えた通りの人となる」(箴言 23 : 7)、あるいは「求めよ、そうすれば与えられるであろう」(マタイ 7 : 7)、さらに「なんでも祈り求めることは、すでにかねえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ 11 : 24) とあって、「人間の思考は現実化する」という引き寄せ系自己啓発本の主張に至る所で裏書きしているからである。

しかし、引き寄せ系自己啓発本の主張をサポートするものとして、自己啓発ライターたちが聖書以上に頻繁に引用したのは、アメリカで最も人気のある思想家、「コンコードの哲人」ことラルフ・ウォルドー・エマソンであった。と言うのも、有名なエッセイ「Over-Soul」などを引き合いに出すまでもなく、そもそもエマソンの思想には「人間を含めた万物は神の一部である」といった汎神論的な側面があり、それはある意味、先に紹介した「引き寄せ系自己啓発本」(あるいは、その理論的土台となっている「ニューソート」)の基本概念である「宇宙=エーテル説」に非常に近いものであって、そのためエマソンの様々な言説を前後の文脈から切り離して取り出してみると、自己啓発本のライターたちの主張と極めて似通ったものに見えるからである。事実、「あなたが意を決しさえすれば、宇宙はその実現に向けて力を惜しまないであろう (Once you make a decision, the universe conspires to make it

happen.)」とか、「人間は、自分が見ようと思ったものを見る (People only see what they are prepared to see.)」、あるいは「偉大な人間は絶え間なく秘密の力を照射し、それが常に偉大な結果を引き寄せる (Great hearts steadily send forth the secret forces that incessantly draw great events.)」などといったエマソンの諸言説は、そのまま引き寄せ系自己啓発本の言説と言っても通用する。またそうだとすれば、エマソンの様々な著作物の中にこれらの言説を発見した引き寄せ系自己啓発ライターたちが、自分たちの主張を裏書きするものとして、これらを盛んに引用し始めたのも頷けるだろう。

ちなみに、こと「引用」に関して言えば、自助努力系であると引き寄せ系であるとを問わず、自己啓発本というものは元来、過去の文献からの引用に重きを置く文学ジャンルであって、新しい自己啓発本は必ず過去の自己啓発本を引用する。そしてその新しい自己啓発本はその後に出るさらに新しい自己啓発本によって必ず引用されることになるのであって、要するに自己啓発本のライターは、先行する過去の自己啓発本の言説に依拠し、それを現代の読者に紹介しつつ、その伝統の上に自分自身の言説を上乗せして行くことを常とするものなのだ。その意味で自己啓発本というのは、「引用文学」と定義づけられるものなのである。だから 19 世紀末の引き寄せ系自己啓発ライターたちが、19 世紀アメリカを代表する思想家たるエマソンに目を付け、その諸言説を引き寄せ系自己啓発言説の拠って立つ支柱と見定めて以来、その後には出版される自己啓発本の大半——「自助努力系自己啓発本」をも含めた大半——が、エマソンの言葉を盛んに引用するようになり、今日に至っているのである。

では具体的にどのようなエマソンの文が、どのような自己啓発本の中に引用されているのか。ここで幾つか例を挙げてみよう：

- 「人生最高のご褒美にして無上の宝となるのは、何かをやり抜く心を持って生まれてくることだ。それが仕事をもたらし、幸せをもたらししてくれる」(Orison S. Marden, *Pushing to the Front*, 1894)
- 「生き生きとした思考は、それを描くパワーをもたらす。その源の深

さに応じて、それを投射する力が発揮される」(Charles F. Haanel, *The Master Key System*, 1916)

- 「私は静かな、そして小さな声を信じる。それは私の中のキリストの声なのだ」(Ralph Waldo Trine, *The Higher Powers of Mind and Spirit*, 1917)
- 「自然の法則は私たちになすべきことを教えてくれる。ただ素直に従うことだ。人にはそれぞれの方法で生きる手立てがある。耳をすませて静かに聞けば、正しい法則があなたにも聞こえてくるだろう」(Napoleon Hill, *Think and Grow Rich*, 1937)
- 「我々の行動の根源は思考である」(Claude M. Bristol, *The Magic of Believing*, 1948)
- 「実行せよ、そうすれば力が与えられるであろう」(Maxwell Maltz, *Psycho-Cybernetics*, 1960)
- 「あなたがするのを怖れていることをしなさい。そうすれば、その恐怖が死ぬことは確かだ」(Joseph Murphy, *The Power of Your Subconscious Mind*, 1963)
- 「健康と自由な一日が与えられれば、帝王の栄華も馬鹿らしく思われるほど幸福になれる」(G. Kingsley Ward, *Letters of a Businessman to His Son*, 1990)
- 「やみくもな一貫性は、小心者の迷信である」(George Leonard, *Mastery: The Key to Success and Long-Term Fulfillment*, 1991)
- 「私たちの前にあるものも、後ろにあるものも、私たちの中にあるも

のに比べればほんの些事にすぎない」(Donald J. Trump, *Think Like a Champion*, 2009)

○「すべての人生は実験だ。沢山実験を重ねるほどよくなる」(Pam Grout, *E-Squared*, 2013)

○「人生は旅であり、目的地ではない」(Jennifer L. Scott, *Polish Your Poise with Madame Chic*, 2015)

以上、各時代にベストセラーとなった自己啓発本の中に引用されたエマソンの文をリストアップしてみたが、何しろ 19 世紀末から今日に至るまで百年以上に亘って出版され続けてきた自己啓発本の大半がエマソンの文を引用しているのだから、このようなリストは、その気になれば、延々と伸ばし続けることができる。

一つの謎

ところで、これほど頻繁に各種自己啓発本の中に引用されるエマソンの文の中でも、ひと際頻繁に引用される一文がある。それは、

A man is what he thinks about all day long.

という文で、敢えて訳すならば「明けても暮れても考えている事柄、それがその人自身なのだ」となる。意味としては、例えば音楽のことばかり考えている人が音楽家であり、ビジネスのことばかり考えている人が実業家であり、学問のことばかり考えている人が学者であるということであるが、これを逆にとれば、音楽のことばかり考えていれば誰でも一流の音楽家になれるし、ビジネスのことばかり考えていれば実業家として成功できるし、学問のことばかり考えていれば学者として一家を成せる、ということであって、「どのような夢であれ、四六時中そのことについて考えているようであれば、その夢は必ずや実現するであろう」という非常にポジティブなメッセージにもなり

得る。そしてそれはまさに引き寄せ系自己啓発本が主張する「人間の思考は現実化する」というテーゼと同趣旨のメッセージなのだから、このエマソンの一文が、引き寄せ系自己啓発本の主張を最もよく体现するものとして、後世の自己啓発ライターたちから繰り返し引用されているのも納得できるだろう。

ところが、ここに一つの謎がある。今挙げた“A man is what he thinks about all day long.”は、多くの自己啓発ライターから引用され、インターネット上でも「エマソンの箴言」として堂々と紹介されているにも拘らず、その出典が不明なのである。論者としても、この一文がエマソンのどのエッセイに書かれているものかを調べるべく、様々なエマソンの引用句集を博捜し、エマソン全集にも当たってみたのだが、現時点でエマソンのこの一文の出典を明らかにすることはできていない。

果たしてエマソンは、どのエッセイの中にこの言葉を記したのだろうか？

伝言ゲーム

だが非常に興味深いことに、この調査を行なっている中で、先の一文に非常によく似た文を2つ、見つけることができたのである。³ そのうちの1つは、

Life consists in what he is thinking about all day.

というもので、これは *Journals of Ralph Waldo Emerson* の1847年8月のエントリーに記されている。もう1つは1909年に出たエマソン全集の12巻目、*Natural History of Intellect and Other Papers* 中の“Powers and Laws of Thought”というエッセイの中に記された、

What is life but what a man is thinking of all day?

という文である。言うまでもなく、文の意味としては先に挙げた“A man is what he thinks about all day long.”とほぼ同じであると言っていいだろう。

状況を整理すると、エマソンが書いたとされる“A man is what he thinks about all day long.”という一文は、後世の様々な自己啓発本の中で盛んに引用されるものの、本家本元のエマソンの著作物の中には見当たらず、ただこれとよく似た“Life consists in what he is thinking about all day./What is life but what a man is thinking of all day?”という文は確認できる、ということである。

となれば、こういう仮説は成り立たないだろうか？ すなわち、エマソンの“Life consists in what he is thinking about all day.”もしくは“**What is life but what a man is thinking of all day?**”という一文を読んだ後世の自己啓発ライターの誰かが、この一文こそ自分たちの主張している自己啓発思想の支柱となるものであると判断し、自分の本の中に引用したのだが、その際、文の趣旨がより明確になるよう、“**A man is what he thinks about all day long.**”という風に若干形を変えて引用した。ところが先に述べたように、自己啓発本というのは「引用文学」であって、いつの時代の自己啓発ライターも先行する過去の自己啓発本を盛んに引用するものなので、誰かが少し形を変えてしまったエマソンのこの文を、さらに後世の自己啓発ライターがそのまま「エマソンの箴言」として自分の本の中に引用し、それがまた別の自己啓発ライターによって引用されるという形で、誤って後世に伝わってしまったのではないか・・・。

つまりエマソンの箴言を巡って「コピー」と「拡散」が行われ、そうした「伝言ゲーム」の中で、本来エマソンが書いたものではない文がエマソンのものとして後世に伝わってしまったのではないか？

犯人探し

無論、この仮説は現時点でのものであって、今後エマソン自身が“A man is what he thinks about all day long.”という文を書いた証拠が見つければ、撤回しなくてはならない類のものではある。しかし、現時点でこの仮説が正しいと仮定するならば、次なる謎は当然、この伝言ゲームの中で最初にエマソンの文を変形したのは誰か、ということになるだろう。

“A man is what he thinks about all day long.”という文を「エマソンの箴

言」として最初に紹介したのは、一体誰なのだろうか？

この問いに答えるべく、この文をエマソンからの引用として紹介している自己啓発本を調査したところ、論者が調べたうちで一番古い例は、20世紀アメリカを代表する自己啓発ライターであるデール・カーネギー（Dale Carnegie, 1888-1955）の『道は開ける』（*How to Stop Worrying and Start Living*, 1948）であることが判明した。この本の第12章でカーネギーは、自分が人生の中で学んだ最大の教訓は「考えることの重要性」であるとし、エマソンのこの一文を引用しつつ、「まさにその通りではないか（How could he possibly be anything else?）」と述べているのだ。

だとすると、意図的なものであれ、はたまた勘違いによるものであれ、例の「伝言ゲーム」の中で最初に間違いをしでかしたのは、デール・カーネギーなのだろうか？

無論、自己啓発本はその出版点数があまりにも多く、論者としてもそのすべてを網羅的に調べたわけではないので、本当にカーネギーが例のエマソンの言葉を変形させた真犯人であるかどうか、確証があるわけではない。しかし、20世紀半ばのアメリカで最も影響力のあった自己啓発ライターたるカーネギーが、“A man is what he thinks about all day long.”という文を「エマソンの箴言」として紹介したことの影響は、相当大きかったに違いない。と言うのも、この本が出てからわずか4年後の1952年、今度はノーマン・ヴァインセント・ピール（Norman Vincent Peale, 1898-1993）という著名な自己啓発ライターが『積極的考え方の力』（*The Power of Positive Thinking*）という著書を発表し、その中で彼もまた“A man is what he thinks about all day long.”という文をエマソンの箴言として紹介しているからだ。カーネギーの『道は開ける』も、ピールの『積極的考え方の力』も、20世紀半ばのアメリカにおける記録的な大ベストセラーであるだけに、この両書が揃って“A man is what he thinks about all day long.”という一文にエマソンのレタテルを貼ったとなれば、当時のアメリカ人読者の多くがそれをそのまま受け取ったとしても不思議ではない。

事実、1950年代後半に入ると“A man is what he thinks about all day long.”なる一文の人気はさらに上がり、1955年にはジョーゼフ・マーフィ

ー (Joseph Murphy, 1898-1981) という、これもまた非常に著名な自己啓発ライターが『宇宙はあなたの祈りに従う』(*How to Attract Money*) というベストセラーの中でこのエマソンの一文を引用している。なおマーフィーは彼のもう一つのベストセラーである『眠りながら成功する』(*The Power of Your Subconscious Mind*, 1963)をはじめ、その数多い著作の中で何度もこの文を引用しているので、ひょっとしたらエマソンの箴言を巡る「伝言ゲーム」の中で、この人が一番罪深いと言えるかも知れない。

しかし、この伝言ゲームはまだ続く。アメリカ 20 世紀を代表するもう一人の自己啓発ライターであるアール・ナイチンゲール (Earl Nightingale, 1921-1989) もまた、『ザ・ストレンジスト・シークレット』(*The Strangest Secret*, 1957) という著書の中で “We become what we think about. A person is what they think about all day long.” という一文をものしているのだ。ナイチンゲールはこの文を記すに当たってエマソンからの引用である旨は明記していないのであるが、彼が先行する自己啓発本経由で “A man is what he thinks about all day long.” という文を記憶していたことは明らかだろう。

このように、ピール、マーフィー、ナイチンゲールといった著名な自己啓発ライターたちが 1950 年代にこぞって先のエマソンの箴言を引用していることから見ても、1948 年に出版されたカーネギーの大ベストセラー『道は開ける』が、仮にエマソンの文を誤った形で伝えてしまった直接の犯人ではなかったとしても、これを世に広めるのに大きな役割を担ったことは疑えないのではないだろうか。

なお、先のエマソンの箴言はこの伝言ゲームの中で更なる進化 (?) を遂げており、現在では、

A person is what he or she thinks about all day long. (強調筆者)

のような形で引用されることも多い。⁴ 仮にもしこれを鵜呑みにするならば、どうやらエマソンは 19 世紀において既に「政治的正しさ」を意識していた、ということになるだろう。

驚くべきエマソン引用の実態

だが、話はここで終らない。巷間、誤って伝えられている「エマソンの箴言」は、実は先の一文だけではないのだ。

例えば 2014 年に公開された『アメージング・スパイダーマン 2』という映画の中で、高校卒業を迎えた主人公のピーター・パーカーとメイ叔母さんの間で以下に示すような会話が交わされる：

メイ叔母さん : ベン叔父さんだったら、きつこう言うわね。

ピーター : うん、僕にも想像できるよ。「急げ、パーティーは終わったんだ。さっさと仕事を見つけてろ」でしょ。

メイ叔母さん : そうそう。それから、それに続けてきつと「既に他人の通った道を行くな、我が道をゆけ、そしてそこに道を残せ」って言うわ。

ピーター : ラルフ・ウォルドー・エマソンだね。

メイ叔母さん : あら、違うわよ。

ピーター : 違うってどういう意味？

メイおばさん : ベンは私に、「これは俺が作った名言だ」って言ったもの。

(強調筆者)

ちなみに強調を付した「既に他人の通った道を行くな、我が道をゆけ、そしてそこに道を残せ」というベン叔父さんの名言は、英語では “Don't just follow the path, make your own trail.” となっているのだが、これは一般にエマソンの箴言とされている “Do not go where the path may lead, go instead where there is no path and leave a trail.” に、ベン叔父さんが若干手を加えたものと考えられる。

ところが、この “Do not go ～.” という一文は、そもそもエマソンが書いたものではないのである。この文のオリジナルは Muriel Strode (1875-1964) という詩人が1903年に発表した “Wind-Wafted Wild Flowers” という詩の中に出てくる “I will not follow where the path may lead, but I

will go where there is no path, and I will leave a trail.” という一節であって、ベン叔父さんの名言である “Don’t just follow the path, make your own trail.” のオリジナルは、実はエマソンではなく、女流詩人ミュリエル・ストロードだったのだ。

ではストロードの詩の一節が、なぜ一般にエマソンの箴言と見なされているかという点、*Middle School Journal* という中等教育に関する学術誌がその1992年1月号において、この一節を誤ってエマソンの箴言として紹介してしまったからである（図1参照）。⁵



Do not go where the path may lead, go instead where there is no path and leave a trail.

—Ralph Waldo Emerson

図1 *Middle School Journal* に掲載されたエマソンの「箴言」

中等教育に携わる教師を読者層とする教育学の専門誌が、この一文をエマソンの箴言として堂々と紹介しているのだから、これに感銘を受けたアメリカ中の教師たちがこの一文を教室で生徒たちに伝えた可能性は十分にある。ゆえに、『アメーキング・スパイダーマン2』の中で、ピーターがベン叔父さんの名言の元ネタを「エマソンだね」と誤って推測したことについても、これをピーター一人の責任に帰すことはできないのだ。

まだまだある「インチキ・エマソン」

しかし、上の例は確かに誤った引用であるとはいえ、（おそらく）意図的なものでない分、まだ許される。実はこの世にはもっと悪辣なエマソンの誤引用が沢山あるのだ。

例えば2006年に出版されたロンダ・バーン（Rhonda Byrne, 1945-）の『ザ・シークレット』（*The Secret*）なる引き寄せ系自己啓発本（及びそのDVD版）の中に、エマソンの言葉として

The secret is the answer to all that has been, all that is, and all that will ever be.

という一文が挙げられていて、あたかも今、バーンが明らかにしようとしている成功の秘訣、すなわち「シークレット」なるものが、エマソンのお墨付きであるかのように演出されているのだが、この言葉は完全に彼女のオリジナルである。つまりロンダ・バーンは自分で勝手に作った言葉を、エマソンの箴言だと言い募っているのだ。⁶ だが、これほどあからさまなインチキであるにも拘らず、彼女の『ザ・シークレット』は全世界で2,000万部が売れる大ベストセラーとなったため、今ではこの言葉も立派に「エマソンの箴言」として流通している。事実、「AZ QUOTES」などのインターネット上の引用句サイトで検索してみれば、この一文がエマソンの文として堂々と紹介されていることが分かるはずである。

そしてこのようなエマソン引用の実態に気づいてみれば、本稿の中で「様々な自己啓発本の中に引用されているエマソンの文」の例として紹介した数々

の引用文も、それらが本当にエマソンの書いたものかどうか、かなり怪しくなってくると言わざるを得ない。何しろ世に大量に出回る自己啓発本の大半は、たとえ先行する諸書籍から引用したとしても、その出典を一々記したりはしないのだから。

コピペされ、拡散されるエマソン

以上述べてきたことから明らかになるのは、かの文豪ラルフ・ウォルドー・エマソンの諸言説は、今、オリジナルな文脈から切り離され、ことさらにポジティブなニュアンスが強調された形で無数の自己啓発本の中に引用され、さらにそこを基点にして「コピペ」と「拡散」が続けられているということである。そして、そのようにコピペ・拡散されていく過程で、エマソンの言葉はしばしば変形を蒙ることがあるばかりでなく、本来エマソンの言葉でないものまでも「エマソンの箴言」ということにされ、そうした出典不明のエマソンの言説が大量に、そして広くアメリカ社会に流通・浸透しているという実態がここにはある。

否、これはアメリカに限ったことではない。本物であれ、偽物であれ、エマソンのポジティブな、すなわち「自己啓発的」な言説は、アメリカのみならず、太平洋を越えて遠く日本にも大量に流れ込んでいる。エマソンのエッセイが日本で初めて刊行されたのは 1882 年、すなわち奇しくもエマソンの没年に東京大学が出版した英語教科書版（外山正一編）であり、1890 年には『文明論』の佐藤重紀訳が、また 1894 年には北村透谷による評伝『エマソン』が、さらに 1917 年には自らの娘を「エマ」と名付けるほどエマソンに傾倒した英文学者・戸川秋骨による『エマソン全集』（全 8 巻）が出るなど、もともとエマソンと日本とのつながりは浅からぬものがあるのだが、⁷ その当時からはほぼ百年を経過した今の状況を見ると、例えばエマソンの代表的なエッセイである“Self-Reliance”は、日本では伊東奈美子訳『自己信頼』（海と月社、2009 年）として、また三浦和子訳による「超訳版 エマソンの『自己信頼』（PHP 研究所、2013 年）として出版され、書店では「アメリカ文学」の棚ではなく、「自己啓発本」の棚に置かれてベストセラーとなっているし、中島輝著『エマソン 自分を信じぬく 100 の言葉』（朝日新聞出版、

2017年)や、おおつぼなおと著『エマソン名言集』(キンドル版、2016年)など、エマソンの箴言だけにスポットを当てた本も続々と出版されている。さらに2014年には「エマソンの生き方に倣う」ということを標榜したライフスタイル誌として『エマソン』なる雑誌も発刊されるなど、⁸ 今日の日においてエマソンは、文学畑でというよりもむしろ「自己啓発畑」で確実に信奉者を増やしていると言っている。その点、アメリカでも日本でも状況はほぼ同じなのだ。果たしてそれが正しいエマソン受容の形なのかどうかは別として、事実としてそうなっているのである。

無論、こうした実態について、単に「嘆かわしい」と考えることもできるだろう。しかし、期せずして自己啓発本の世界に取り込まれることになったために、結果としてエマソンの様々な言説、とりわけポジティブな言説が生き残り、広く世間に流通して、21世紀を生きるアメリカの、そして日本の人々を励ましているのだとしたら? 「19世紀アメリカの大文豪」という黴臭いレッテルを跳ね除けることに成功したエマソンが、自己啓発本の世界に君臨する偉大なる「グールー」として、今なお多くの人々に生きる指針を提供し続けているのだとしたら? それはエマソンという一人の文筆家にとって、むしろ好ましい状況であると言えるのではないだろうか?

だとすれば今日、エマソン文学の影響、あるいはエマソン文学の意義というものを考えるのであれば、「19世紀アメリカ文学」という狭いカテゴリーの制約に捉われるのではなく、それよりも遥かに広いカテゴリーである「自己啓発文学」の視点を新たに取り入れることが、大いに必要とされているのではないだろうか? 「アメリカ文学研究」という象牙の塔を出て、市井の人々がエマソンの諸言説とどういう形で出会っているのか、またそうやって知ったエマソンの「箴言」によって人々がどれほど勇気づけられているのか——そういったことについての認識を持つべきなのではないだろうか? 精密な作品分析だけでエマソンのすべてが分かるといったアカデミックな研究スタイルへの拘泥を、そろそろ見直す時期に来ているのではないだろうか?

なんとすれば、エマソン本人も、常に認識を新たにすることの重要性を説き、「やみくもな一貫性は、小心者の迷信である」⁹ という箴言をものしているのだから。

注

- 1 「引き寄せ系自己啓発本」の誕生経緯や「ニューソート」との関連については、拙論「アメリカにおける『自己啓発本』の系譜」『愛知教育大学 外国語研究』第 49 号 (2016)、67-84、及び「アメリカにおける『精神療法学』の系譜」『愛知教育大学 外国語研究』第 50 号 (2017)、25-43 を参照せよ。
- 2 例えばアメリカの著名なフェミニスト Frances Maule Björkman は、1910 年、自己啓発本の隆盛について “Most of it is of a character to repel persons of critical taste. Its language is crude. It makes assertions in regard to scientific matters that cannot be proved—or, at least, have not been proved. It is mixed up with spiritism, astrology, mind-reading, vegetarianism, reincarnation, and all sorts of other “crank” doctrines and fads—and with a few actual “fakes.” と述べ、これを批判している。
- 3 当該の一文を探すために論者が使用した文献は、*The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, 1st AMS edition, 1968., *Essays By Ralph Waldo Emerson* (Merrill’s English Texts), ed. Edna H. L. Turpin, Charles E. Merrill Co., 1907., *Journals of Ralph Waldo Emerson with Annotations*, eds. Edward Waldo Emerson and Waldo Emerson Forbes, Replica Books, 1999., *Light of Emerson: The Cream of All He Wrote: Two Thousand Quotable Thoughts and Epigrams*, ed. H. H. Emmons, The Book Tree, 2011., *Ralph Waldo Emerson*, Delphi Classics (kindle edition), 2013., *Inspiration & Wisdom from the Pen of Ralph Waldo Emerson*, ed., Odelia Floris, Ernest Acorn Press (kindle edition), 2015., *The Quotable Emerson: Life lessons from the words of Ralph Waldo Emerson*, ed. Richard W. Willoughby, Amazon Services International, Inc. (kindle edition). 及び Wikiquote の「Ralph Waldo Emerson」の項目である。
- 4 例えば「SayQuotable」というサイト (URL: <http://sayquotable.com/>)

- quotes/quote-about-remember-a-person-is-what-he-or-she-thinks-about-image.html)を見ると、この文がエマソンの箴言として紹介されている。
- 5 National Middle School Association, *Middle School Journal*, Vol.23 (January 1992), 42. にエマソンの言葉として “Do not go where the path may lead, go instead where there is no path and leave a trail.” の一文が掲載された。「Quote Investigator」(URL: <https://quoteinvestigator.com/2014/06/19/new-path/>) の記事を参照せよ。
 - 6 Julia Rickert, “A Little Secret about The Secret,” in *Reader* (URL: <https://www.chicagoreader.com/chicago/a-little-secret-about-the-secret/Content?oid=925131>) や “Fake Quotes,” in *Philosophy for Life and Other Dangerous Situation* (URL: <http://www.philosophyforlife.org/fake-quotes/>) を参照せよ。
 - 7 山本 晶『エマソンの「文明」論 その新出邦訳「開化」に関する考察』慶應義塾出版会 (2017)、1-49. に拠った。
 - 8 創刊の辞の中に「すべての人生が実験なのだ。実験すればするほどうまくいく」「1 オンスの行動は、1 トンの理論にも値する」というエマソンの箴言を引用したライフスタイル誌『エマソン』は、2014年4月、株式会社ギャンビットから創刊されたが、残念なことに同年9月に第3号をもって終刊となった。
 - 9 幸いなことにこの「箴言」は「自己信頼」(“Self-Reliance”)にある一文 (“A foolish consistency is the hobgoblin of little minds,” (以下略))なので、エマソン本人が書いていることは間違いない。

(謝辞：本研究はJSPS 科研費 16K02488 の助成を受けたものである。)